



随

想

与えられた仕事

鎌田信子

教師はひまがありそうでない。世の中で最も忙がしい、解放された時を持たぬ職業である。春夏の休みも新学期の準備に追われ、休日に買物に出ても学生にかまりどこかで誰かに見られる。こんな具合で目がまわりそうだ。今の仕事にとび込んで

早、十二年が去った。十二年間の歩み、それは私に与えられた仕事の歩みである。一人の教師、主婦、母の三役がそれである。この歩みの一コマをつつとってみると――

私は今、同志社と同系の金城学院の教師である。働く女性となつて大きな二つの問題にぶつかった。第一に新しい職場は未知な事ばかり、その上恩師の言われた「私立学校は卒業生で育てるのです」という言葉。卒業生でなくても学園を愛せるはず。神から与えられた仕事への感謝によつて生まれると信じた。私のペースで歩めばよいと思つた。第二は家庭と子供のことである。最もよき協力者は夫で、家庭のためよく話し合つた。職をもつ女性には子供の問題の重みは大きい。犠牲をうみやすいからだ。子供は神からあづかつた賜、神に喜ばれる人に育てる義務がある。第一の問題は自分なりに努力し研究も進んだが、第二の問題は大きかつた。子供が小学校四年生のワンパク大将になるには父母の大きな協力があつたからだ。感謝に耐えない。また今ある姿はすばらしい指導者に恵まれたというところで、偶然ではなく「神から与えら

れた」というのがふさわしい。一宮で幼児教育をしている教会はただ一つである。昔からキリスト教の根のはらない土地であつてみれば当り前である。この幼稚園は聖公会の附属であつたが、幼稚園教育の歴史は古く、県下の第一線をしめている。園長は牧師で市民の古くからの友である。人をグイグイとひきつける不思議な人で、子供の教育・躾・宗教々育のすべてをまかせた。すばらしい二年間の教育であつた。子供の成長に支えられて職場での根がおりましたようである。子供は教会の子として思いのままに育ち、よい少年になつた。昼間、母のいない子には珍しく明るく一人っ子らしくない。僕は神の子だと誇りをもっている。けれども実に謙遜的でとまどう。知らぬ間にごく自然に成長した。教会を二回休むと小さな胸が痛むという。人間の土台は造られた。何とすばらしい賜をいただいたことか。不思議な力に頭が下がる。他人は私に、職業をもち家庭をもち子供を育て大変でしょう、という。

しかし苦しかったことなど現在の生活の陰にかくれてしまつたようである。いつで

も道が与えられていたとは言っても一人三役は楽ではない。見えない神の計画を信じて、まわりの人たちの支えによって初めて育って来たのである。感謝の他に何があるか。これからもあせらず一人三役をつとめたいと祈っている。

(校友・金城学院大学助教授)

民芸のころをもつて

日下部 潤

民芸にひとの眼がそそがれ、関心をもたれるようになったのはそう古いことではないと思います。先日もこの道の先駆者河井寛次郎氏の蒐集展をみました。いづれもみな心惹かれるものばかりでした。それらがつくられた時代、所として人たちをおもつとき、特別の美術工芸品としてではなくて、ひとつひとつが必要に応じてその用途にふさわしく生み出されているのをみました。昔のものでも、今もそのまま使えますし、またよくこんな精巧なみごとなものか

根気よく仕上げられたこととおどろきまします。

この展示されたすばらしいものは全く得がたいものでありますが、古くから日常みじかに使用されていたものが再製されて多く売られています。けれどそれらのものが本来の用途のままではなくて、現代的に転用され、それがまたふさわしく所を得ているのをしばしば見ます。もしそれらが年月のへだたりを経てなお人の心にさわらず調和しているとすれば、民芸のもつやわらぎ、したしみ、あたたかさが通うているからだと思います。

「女性と仕事」についてもそのことを考えます。もともと男女のもつ役割は自づとときまっております。しかし、時と場合によって新しいかわった役割をはたさなければならぬことも出てきます。女性が内において仕事にはげみ、男性が外で働くのが自然とされていきました。けれども女性も外にあつて男性におとらぬ働きをすることもあります。それは家の奥ふかくしまわれない本染の和藍のふとん地が得がたいものとしてみごとな衝立となつていのに似てい

ます。心をこめてつくられた陶磁器が台所でそれにふさわしく日常の役割をはたしているなら、それはまた意義ふかく大事なことと思います。

各人各様、女性が内外いづれにあるにしても、民芸のもつ気どらぬ美しき、親しき、思いやり、そして知性を失わずにありたいものと願っています。

(大15女専英卒・主婦)

つれづれに

中津 弘子

旧制最後の同志社女専を、落第しようにも入る級がなかったためか、心残りながらも押し出して頂き、その後一年ほど入った放送界の仕事が早いものでもう十四年近くにもなつてしまつた。当時は民放発足間もないことで、何気なく受けた試験が、ついぞ宝くじ等当つたこともないのに、まぐれに当り、この稼業に身を没する仕儀とはなつた訳である。

さて、七年余りの朝日放送アナウンサー生活を経て、フリーアナウンサー、ある方はTVタレント、司会者等とも呼んで下さるが、まあまあ要するに何でも屋である。

こういう仕事も女性のグラマージョブの一つに上げて下さる方がいるが、グラマラスなものに憧れてこの道に入ったらそれこそグルーミイである。

まだABCにいた頃、何度となく後輩の方々から、アナウンサーになりたいのだがどういう大学で、どういう勉強をすれば良いのかと聞かれたことがあった。おこがましいながらその都度、アナウンサーになるための大学ではないということを経返して来た。仕事を持つためのシェークスピアでもミルトンでもないのである。何時だったかTVのインタヴューで、どうして大学に行くのかという質問を受験生に与えていたことがあった。就職のため、良い会社に入るためというのが半分近くもあつたらうか。今の世では仕方のない答えかもしれないが、何か空ろな想いが残ったのは私だけであろうか。若い人たちのあんなにも澄んだ瞳をカメラは捕えていたのに、その奥に

は得体の知れない何かがかくされていたのであろうか。確かに生活ということとはきびしいことなのだけれど……

一昨年テレビの一等夫人アメリカ版製作のため、VOA生活から一年振り再度アメリカを訪れる機会を得て、ハーバード大学附属ラドクリフ女子大学長メリー・パウインテング女史をボストンにお尋ねした。

女史は仕事に、家庭に縛られて勉強したくとも出来ない女性のために、アダルト・エデュケーションという母親学級を開いていらつしやるが、月謝もいらなければ、子供のある母親のためには子守代も出して勉強のチャンスを作つていらつしやるというこのシステムに全く羨望の念を禁じ得なかつた。

アメリカの働く婦人の平均年齢は36歳、42歳といわれる。日本のそれと比較してみるとため息の出る話ではあるが、あのオバア何時までのさばるつもりだろう々というような男性社員の話を耳にするにつれて、どちらにも言い分はあるが、全く底知れぬ悲しい気持ちにさせられてしまう。

何が何して何とすれば何となるのか、な

かなかむつかしい問題ではあるが、はて、現実のこの大きな壁をどのようにつき破つたものであろうか。

(昭26女専英卒、フリー・アナウンサー)

女子大卒十五年

山口 信子

卒業した春、米人宣教師団への日本語教師として、ある小さなミッションに就職した。その夏、軽井沢での東京日本語学校の講習会に派遣され、山の上のYWCAホテルから講習会場まで十日間通つた。翌年、宣教師が各地に散ると、そのミッション主宰の放送関係を手伝うことになった。学校習つただけの英語での冷汗だらけの通訳、放送事務、タイピスト、渉外、雑役。神戸の伯父の家から大阪地区のミッションまで往復約三時間余の通勤であつた。やがて二年後、一人っ子の私は父母に請われて帰郷した。

特に結婚する気持ちにもなれず、先輩の後

席に坐った。当時のアメリカ文化センターである。平和条約発効後で、文化センターも米国から日本側に移管され、その運営が困難視され始めていた。何万という貴重な図書、視聴覚資料、外国語講座を含めた有益な文化活動をより活用し、地方文化の向上に役立てたいと願った。当時二十八歳。

母が重病になり、死んだ。一人っ子の私に夫もないことを悲しみながら。眼先に与えられたものだけを追い、仕事に夢中になっていた自分の環境の唯一の支えだった母と、その愛情が空に消えた。半年余、虚脱していた。

翌年、米国の姉妹都市から副市長夫妻が訪問した。命ぜられて通訳案内をした。姉妹都市関係を通して、日米親善と世界平和を願う彼らから、市民代表として招かれることになった。幸運である。母を失なった悲しみの重さが、親善使節という重責によってようやく軽減された。

乏しい語学力での、朝食会、ランチョン、ディナー、ティー、各学校、教会、社会奉仕団体等でのスピーチ、あいさつ。そして各家庭を廻つての生活。緊張の毎日が

つづく。体重五十一キロが、八ヵ月後、四十六キロで帰国。それからまたも無我夢中で二年たった。副市長の好意と招待意図に報い、送り出してくれた郷里の市民への奉仕を願って。三十一歳。

北九州にあつた旧五市は合併して北九州市が出来た。文化センターは、市教委の中に吸収され「機構上、一係に縮小された。時代の流れである。労働組合の現実、勤労意欲とそれをばばむかのような命令や規則。職制にがんじがらめにされた給料生活者の悲哀と怒り。数々の矛盾がようやく私の眼前をさぎぎった。おそすぎる。三十三歳の晩秋である。

これがもし身上相談であつたら解答者はこういうだろう。結婚することですね、と。

だが、いまも私は独身である。文化センターの仕事に捨てきれない意義を感じ、国際間の理解促進こそ平和の基礎だと英会話クラスの婦人たちと語り合いながら。市役所の膨大な機構の中で押しつぶされる自分のアイデアは、家業の趣味の店で生かしてもらい、欲求不満を解消する。この春、もう三十七歳になった。現在、自分で初心者

用英語テキストをつくりたいとその費用に頭を痛めている。

限られた残数内で、データだけ並べた。ここまで読まれた方は、それで本人は幸せなのかどうかと思うだろう。だが私は、幸せとか不幸とか考えたことがない。それが問題だと時に思う。いつもあたえられた場所で精一杯生きているだけだ。一人の女が女子大学を出て十五年。このサンプルへの批判や感想はさまざまだろう。

(昭29女子大英卒・北九州国際文化センター職員)

この仕事に

生き甲斐を感じて

佐々木 浅子

「この道より我を生かす道なし、我はこの道を歩く。」誰かの有名な言葉を想い出す。

思えばもともと子供好きだった私は、女専の三年間家政科で育児学を、更に進んで大学の三年間は社会学科で社会福祉を専攻、そして六年間の同志社での学生生活で知らず知らずの中に「良心を手腕に運用す

る……」新島襄先生の精神を学び、またキリスト教からうけた愛の哲学を土台に、結婚してから、看護婦、助産婦、保母の資格をとり、今日この道（乳幼児保育）に全生命をうちこんでいる。私が同志社で感化された先生方は、女専時代の保良せき先生、多田歳夫先生、大学時代では故竹中勝男先生や現在でも御活躍中の社会学科の嶋田教授をはじめとする諸先生方、それに一度もお話したことはなかったけれど故牧野総長の言葉である。「自からシャボンになれ、シャボンは世の中をきれいにし、自から消える、そういう人になれ」というシャボンの教訓である。これを今でも時々おもい出しては自分自身をあげましている。私にとって同志社はわが心のふるさとである。

私は赤十字病院で約十年足らずの間、ケースワーカーをしていたら、子供がすっかり祖母の過保護のために消極的な依頼心の強い子供になり、それでは困るので勤めを止める決心をし、家庭で家事と仕事を両立させる仕事、しかもその仕事で、自己の今までの能力を充分発揮することが出来る仕事はないものかと考え、遂にこの昼間里親

の仕事をする事になった。

私は病院のケースワーカーをしている時に、いかに社会的地位があり、立派そうに見える人も、一旦病気になるれば「その人の幼少時の生い立ちに歪みがある」と積極的に病気に対する心構えが乏しく、治療上、いろいろな障害を引き起す原因にもなることを多々経験し、それからパーソナリティーの発達に興味をもち、健康な身体も、情緒も乳幼児期の経験に根ざすものであるから、微力ながら両親の共働きにより保育に欠ける乳幼児の世話をして、正しい人間形成において立つことが出来たら、また婦人問題も少しくらい解決されるのではないかと、僅かな貯金をはたいて家を改造し、財力もなく経営について無知な私は、ただ保育に対する情熱をもやして、一人でも社会の人に喜んでもらえばよいというささやかな望みをもって初めた。それからもう五年余りになる。私たちの同志も五人ほどあつまって、現在二十名ほどの乳児を対象に生き甲斐ある日々を送っている。

この仕事は単なる子守りでなく、生活の基礎習慣、社会的ルールとか、将来その子

供が独立して生きる能力などをつちかうのである。そのためには保育者が一人一人の子供を識別し、個別指導の出来る状態にし、また集団保育の特徴として保育者と子供との間でやる教育以外に、子供をつくる集団も一つの保育者のような働きをして、集団のメンバーの子供に教えるという教育効果を用い、乳幼児の保育には家庭と集団との両方が必要だという立場から集団保育を進めている。それで大勢の人数でなしに五人とか十人くらいのグループをつくって保育にあたっている。規模の小さい日のあたらぬ施設であるが、外面のみせかけより、むしろきめの細かい行き届いた保育に重点をおき、正しい愛情と正しい保育技術と正しい知識を三者一体として、いつも同志社人としてのプライドと感謝の念をもつて、良心を全力に充満させて自分自身の能力を最高に発揮させ、毎日忙がしくしかも楽しく送ることが出来て、しみじみと人間としての喜びを味わっている。

（昭22女専育児卒・昭25大社卒）